

# 夏目漱石『明暗』論

深町博史

## 一、はじめに

夏目漱石の小説『明暗』は一九一六（大正五）年五月から一二月にかけて「東京朝日新聞」と「大阪朝日新聞」の二紙上に掲載され<sup>①</sup>、連載途中で作者が死去したことより全一八八回で絶筆となり、一九一七（大正六）年一月に岩波書店より単行本が刊行された。本作は結婚から半年以上が経過した津田由雄と妻である延の夫婦関係を軸とし、互いや周辺人物達との間で暗闘する二人の姿を描き、その言葉とは裏腹な心理を剔抉している。漱石最後にして最長の作品は未完でありながら、「数少ない真の近代小説の一つ」<sup>②</sup>、「それまでの諸作品がさながら大成され、質的にも一段と高い次元に統合されたような感じを覚える」<sup>③</sup>などと総じて高く評価されてきた。

先行研究の内容は多岐に渡っており、様々な観点が考えられる。その際に大きな問題となるのは、作品が未完に終わってしまったことや、「則天去私」という概念との関係である。しかし、本稿では張り巡らされた伏線をもとに幻の結末を推測することはせず、全一八八回の内容に取り組む。また、「則天去私」は漱石が自らその内容について記した文献が存在しないため、門下生らの証言はあくまでも参考程度にとどめ置く。

そのうえで、津田と延、そして両者における「愛」を対象とした分

析と考察を行うこととする。ごく基本的な論点ではあるが、これを「思ひ出す事など」から「点頭録」に至るまでの諸連載における問題意識の延長上に捉えることで、従来の〈我執〉、〈エゴイズム〉とは異なる側面から本作の特質と作品の構造を明らかにしたい。

## 二、「ヂスイシユージョン」、「半信半疑」、「一体二様の見解」から「則天去私」へ

作品分析を始める前に、『明暗』の連載ときに漱石がしきりに周囲に語ったとされる「則天去私」の概念について概観しておきたい。周知の通り、漱石自身はその言葉の内実について直接言及した文章を残しておらず、久米正雄、森田草平、安倍能成、松岡譲などの門下生らの回顧により間接的に伝えられている。その中でも松岡の「宗教的問答」<sup>④</sup>は作家研究や作品研究において度々注目されてきた。

漸く自分も此頃一つのさういつた境地に出た。『則天去私』と自分ではよんで居るのだが、他の人がもつと外の言葉で言ひ現はしても居るだらう。つまり普通自分時分といふ所謂小我を去つてもつと大きな謂はば普遍的な大我の命ずるまゝに自分をまかせるといつたやうな事なんだが、さう言葉で言つてしまつたんで

は尽くせない気がする。その前に出ると、普通えらさうに見える一つの主張とか理想とか主義とかいふのも結局ちつぽけなもので、さうかといつて普通つまらないと見られてるものでも、それはそれとしての存在が与へられる。つまり観る方からいへば、すべてが一視同仁だ。差別差別といふやうな事になるんだらうね。今度の『明暗』なんぞはさういふ態度で書いてゐるのだが、自分は近いうちにかういふ態度でもつて、新しい本当の文学論を大文学あたりで講じて見たい

これは漱石が一月初旬の木曜会で語つたものであるとされ、その日の来客は少なく、松岡の他に芥川龍之介と久米正雄、他には「殆ど無言の大学生」が一人参加しただけであつた。そして、若い弟子達との宗教的な談義の中で漱石が「則天去私」の基本的な考え方を示し、同時に「さういふ態度」で『明暗』執筆に取り組んでゐることが明かされたという。思想的境地とも創作方法とも文学観とも解し得るこの抽象的な概念には様々な解釈や位置づけが可能だろう。

実際に松岡は別の文章で「則天去私」の文学観<sup>5)</sup>とし、他方で久米正雄は「私」のない芸術、箇を空うすることによつて全に達すると云ふ人生観、禅で所謂禅定、三味の境地<sup>6)</sup>、森田草平は「先生の説は先生の人生観から芸術上の技巧論に迄互つてゐる」<sup>7)</sup>など、漱石門下生達の記憶や理解には差異が認められる。松岡陽子マックレインはこれらの共通点から推定される事実として「漱石は「則天去私」について死ぬほんの二、三箇月前までは話さなかつた」、「最後の木曜会ではこの課題につき特に熱意をもつて語つた」、「則天去私」とは人が眼前に起こつてゐることを静かに見ることが出来る心境<sup>8)</sup>の三点を指摘している。漱石が「則天去私」の内容を漱石が書き残さなかつたの

は、同時期に病氣や『明暗』の執筆などが重なつていたために余裕がなかつたためとも、それが十分に体系化されていなかつたためとも言えるだけでなく、『明暗』執筆を通じて醸成されたものとも考えられる。ただ、いずれにしても周辺人物の記憶に基づく証言を鵜呑みにするのは危うい。そこで、ここからは『明暗』に至るまでの漱石作品から「則天去私」に至る軌跡を辿ることにする。

『明暗』と同年の一月に掲載された随筆「点頭録」<sup>9)</sup>の第一回では、「時々たゞの無として自分の過去を観ずる事がしばくある」と同時に「一挙手一投足の末に至る迄此「我」が認識しつゝ、絶えず過去へ繰越してゐるといふ動かしがたい真境」があると書かれてゐる。そして「生活に対する此二つの見方が、同時にしかも矛盾なしに両存して、普通にいふ所の論理を超越してゐる現象」のなかでも「自分は此一体二様の見解を抱いて、わが全生活を、大正五年の潮流に任せる覚悟をした迄である」との宣言も行われている。この「一体二様の見解」は「生活」の中から得られた対極的な二つの実感が「矛盾」を超えて共存してゐるうえにそれを「解剖する手腕を有たない」(一)とされていることから、「一視同仁」として語り得る概念とはやや異質であると言えよう。そして、ここで重要なのは「生活に対する此二つの見方が、同時にしかも矛盾なしに両存して、普通にいふ所の論理を超越してゐる現象」が積極的に受け入れられてゐることである。同様に「一体二様の見解を抱く」ことの表明は、漱石文学の中でも重大な意味を持つてゐると考えられるが、以下その点について見ていこう。

漱石文学における一大画期とされる一九一〇(明治四三)年の(修善寺の大患)以降の創作活動に見られる特徴として、小説の作風の変化が見られる前後に随筆が執筆されている点が挙げられる。即ち、(後期三部作)の第一作である『彼岸過迄』前の「思ひ出す事など」、

〈後期三部作〉の第三作である『心』と唯一の自伝的小説『道草』の間に書かれた『硝子戸の中』、『道草』と『明暗』の間に著された「点頭録」である。そして、「思ひ出す事など」も『硝子戸の中』も多様な話題に彩られているが、両者の語りの転機において二つの見方の「矛盾」が語られているのである。

「思ひ出す事など」では作中で唯一上下二回に分割掲載された第七章で「ヂスイリユージョン」(七の下)が問題とされており、大病から生還した喜びや他者への感謝に「始めて生き甲斐のあると思はれる程深い強い快い感じが漲つてゐる」(同)だが、進化論や星雲説の立場から人間の生死について「自己が自然になり済ました気分を観察したら、たゞ至当の成行で、そこに喜びそこに悲しむ理窟は毫も存在してゐない」(同)といい、「甚だ心細くなつた。又甚だ詰らなくなつた」(同)と記されている。この後、「ヂスイリユージョン」は保留のまま、病状と近況の報告のためとして開始された語り<sup>⑩</sup>がにわかに転調し、第八章からは「忘るべからざる八月二十四日」(八)に至る回想や「好意の干乾びた社会」(二十三)など、それまでの「閑適」(四)な趣とは異なる調子で「死」や「生」を考察していく。

また、『硝子戸の中』では第六章から第八章にかけて、近来「死は生よりも尊とい」(八)と考えていたにも関わらず目の前で生きるべきか死ぬべきかと悩む女性に「凡てを癒す「時」の流れに従つて下れ」(同)と「生」を勧めたことを取り上げ、「常に生よりも死を尊いと信じてゐる私の希望と助言は、遂に此不愉快に充ちた生といふものを超越する事が出来なかつた」(同)ために「今でも半信半疑の眼で凝と自分を眺めてゐる」(同)と明かしている。本作では初回で来客の思いがけない言動について書く<sup>⑪</sup>と宣言されていたが、これ以降過去の回想が頻繁に差し挟まれるようになり、自ら「時」の力<sup>⑫</sup>を確か

めていくかのような語りとなる。

これら「ヂスイリユージョン」と「半信半疑」はどちらも執筆時点での「生活に対する二つの見方」の「矛盾」であると言えようが、作中にその解決は示されていない。自身の考えが現実の出来事に対して機能しないどころか、却つて自他の言動に脅かされた時にどうすればよいのか。二篇の随筆の間で書かれた〈後期三部作〉に目を向けると、悩める知識人として設定された須永市蔵(『彼岸過迄』)、長野一郎(『行人』)、「先生」(『心』)の三者はともに鋭敏な知性を備えているが実生活上の問題には解決を与えられず、むしろそれにより苦悩をどこまでも深め続ける人物であった。「僕の頭は僕の胸を抑える為に出てゐた」(『須永の話』二十八)という須永は「退嬰主義」(『停留所』一)に陥り、「美的にも倫理的にも、智的にも鋭敏過ぎ」(『塵勞』三十八)る一郎は「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか」(同三十九)と言うまでに追い詰められ、「私は倫理的に生れた男です。又倫理的に育てられた男です」(『心』五十六)と自認する「先生」は人間不信から自殺に至つた。そうした意味で〈後期三部作〉は、生活の中で生じる様々な「矛盾」に対する理屈や論理での一義的な解決の可能性が追究された小説群であつたともいえるだろう。そして、「思ひ出す事など」から続くこの問題は『硝子戸の中』の中で重大な変化を見せている。

筆をとつて書かうとすれば、書く種は無尽蔵にあるやうな心持もするし、彼にしようか、是にしようかと迷ひ出すと、もう何を書いても詰らないのだといふ呑気な考も起つてきた。しばらく其所で佇んでゐるうちに、今度は今迄書いた事が全く無意味のやうに思はれ出した。何故あんなものを書いたのだらうといふ矛盾が

私を嘲弄し始めた。有難い事に私の神経は静まつてゐた。此嘲弄の上に乗つてふわ／＼と高い瞑想の領分の上つて行くのが自分には大変な愉快になつた。自分の馬鹿な性質を、雲の上から見下して笑ひたくなつた私は、自分で自分を軽蔑する気分揺られながら、揺籃の中で眠る小供に過ぎない。

私は今迄他の事と私の事をこちゃ／＼に書いた。(中略)嘘を吐いて世間を欺く程の銜気がないにしても、もつと卑しい所、もつと悪い所、もつと面目を失するやうな自分の欠点を発表しせずに仕舞つた。(中略)其所にある人は一種の不快を感じるかも知れない。然し私自身は今其不快に跨がつて、一般の人類を広く見渡しながらかみ笑してゐるのである。今迄話らない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡して、恰もそれが他人であつたかの感を抱きつゝ、矢張り微笑してゐるのである。(『硝子戸の中』三十九)

この引用部に示されているいくつかの「矛盾」と「嘲弄」は苦惱ではなく「微笑」へと昇華されており、厳密には「生活に対する」ものではないとはいへ「二つの見方が同時にしかも矛盾なしに両存して、普通にいふ所の論理を超越してゐる現象」の相似形となつてゐるのである。

無論この「微笑」は留保であつて「半信半疑」の根本的な解決にはなつていないものの、それでも漱石が次に手掛けた『道草』が自らの経験を素材とした自伝的小説であつたことは意義深い。その冒頭で主人公である洋行帰りの健三が「遠い国の臭」(一)を忌みつつも「其臭のうちに潜んでゐる彼の誇りと満足には気が付かなかつた」(同)とされているように、「漱石は健三の意識や自覚を、かれの自覚することのない暗部と相対化して描<sup>13)</sup>」いている。即ち、(後期三部作)を

経た漱石にとつて『道草』は『硝子戸の中』で語らなかつたという「自分の欠点」を「恰もそれが他人であつたか」のように描き出すことを志向するものであり、妻や親類、元養父たちとの関係性の中で苦悩しつつ「人間の運命は中々片付かないもんだな」(八十二)、「世の中に片付くなんてものは殆んどありやしない」(百二)等と語る「思想の無力を識つた生活者」の健三が主人公である小説において「矛盾」は否定しがたく自明のものであつて、既に解決を求めべき主題ではなかつたのであろう。

再び「点頭録」に話を戻すと、冒頭では「生活に対する此二つの見方が、同時にしかも矛盾なしに両存して、普通にいふ所の論理を超越してゐる現象に就いて、自分は今何も説明する積はない。又解剖する手腕を有たない」(一)と述べられていた。この時点では「生活に対する二つの見方」がかつての「ヂスイリユージョン」や「半信半疑」のように否定的な問題としてではなく、「矛盾なしに両存」してゐる「普通にいふ所の論理を超越してゐる現象」として受容されてゐるのである。とはいへそれは「解剖」の及ばないものであるために詳述はされず、「此一体二様の見解を抱いて、わが全生活を、大正五年の潮流に任せる覚悟」が表明されている。一九一五(大正四)年に書かれたとされる手帳の中には、「点頭録」に取り上げる話題を書き留めたと思われるメモとともに「甲でもあり乙でもある。執着もあり執着なくもある。論理的でない。然し論理は果たして事実か。」という記述が見られる。ここからも当時の漱石の問題意識が垣間見えるだろう。

そして「点頭録」第二回以降はそれまで直接的に戦争について言及することの殆どなかつた漱石が一九一四(大正三)年から続く「欧州戦争」を主題として「軍国主義」(第二回〜第五回)と「トライチケ」(第六回〜第九回)について語つてゐる。漱石の糖尿病からくる腕の痛

みにより第九回で早期に連載が中断されたまま未完に終わったため、全体がどのように構想されていたのかも不明である。ただ、「ウナヅク」<sup>①</sup>を意味する「點頭」が付された作品名を考慮するに、戦争という大きな問題に対して複数の観点から語りを継ぐことでその本質を描き出そうとしていたとも考えられる。

「此一体二様の見解」は「時々たゞの無として自分の過去を観ずる事」と「一挙手一投足の末に至る迄此『我』が認識しつゝ、絶えず過去へ繰越してゐるといふ動かしがたい真境」というものではあるが、それ以上にこれまで見てきたような一連の漱石後期文学の展開を経て獲得された、相反するものを同時に認めながら事物の本質へ向かおうとする漱石の新たな態度であったといえるのではないだろうか。そして「則天去私」はその延長上に位置づけられるべきものでありつつも決して完成されたものではなく、『明暗』の執筆過程で形を成しつつあったものなのだろう。

それでは実際に『明暗』がいかなる小説であるのか、次章より本文分析を行う。それにより「則天去私」の内実もいくらか明瞭なものになるだろう。最初に主人公の一人である津田に注目する。

### 三、囚われた津田

作中人物達による津田の評価は概ね芳しくない。例えば、吉川夫人は「あんまり研究家だから駄目ね。(中略) 交際に研究は禁物よ。あなたが其癖を已めると、もつと人好のする好い男になるんだけれども」(十一)と云い、津田の叔母は「贅沢すぎるよ」(二十七)とも「真面目さが足りない人のやうに見えるのよ」(同)と指摘し、岡本は「最初会見の当時から、既に直感的に津田を嫌つてゐたらしかった」

(六十二)とされ、秀は「自分達さへ可ければ、いくら他が困らうが、迷惑しようが、丸で余所を向いて取り合はずにゐられる方」(百九)だと詰つている。妻の延ですら「今の津田に満足してはゐなかつた」(六十)という。先行研究においても、松元寛は『道草』の健三や『こゝろ』の「先生」、或いは『行人』の一郎や『彼岸過迄』の須永のような、常人とは些か異なる神経をもった人物ではなくて、一見いわば余りにも常識的な生き方をする人物を主人公としているようにも思われる<sup>②</sup>、また、学歴があつて鋭い知性を有しながらも「精神の働きが妻や妹、上司や友人の上に損得勘定を基準に発揮される点を常識人、或いは日常生活の利害得失を一步も出ない人物」としている。会社員の津田は周囲の人々に対して自らの利益や体面を守ることに腐心し、そのことを見透かされているのである。確かに(後期三部作)や『道草』で描かれてきた悩み深い知識人達とは異質な形象が与えられているといえる。

このような津田を主人公とする本作の主題を「津田の精神更生記」とする唐木順三の指摘がある。これは一つの捉え方として長く有力視されてきたものであり、津田の、痔の治療に関する「根本的の治療」(一)の必要と、心の中にわだかまる「何うして彼の女は彼所へ嫁に行つたのだらう(中略)さうして此己は又何うして彼の女と結婚したのだらう」(二)という思いが重なり合つて全篇の主題予告となつているという。しかし、作品が津田と清子の再会から間もなく絶筆となつたため、結末は不明のままである。確かなことは、津田は延に真の理由を隠したまま清子の滞在地まで赴くような「常識人」であり続け、清子を前にしても自分の元を去つた理由を直接聞けずにはいたさうことである。それでは、第二回で津田にとつて結婚後も忘れたい女性としてほめかされて以降、清子という名前が明らかになる第一

三七回、実際に登場する第一七六回までの語りは何であったのか。「津田の精神更生」を主題として読み取ることは是非は措くとしても、長い語りの中にその可能性は示されていたのであろうか。

作中には津田が結婚により変ってしまったという証言が複数ある。しかし、変っていない側面や可能性についても言及されている。まず、小林は延に「近頃大分大人しくなつたやう」(八十二)、「丸で人間が生れ変つたやうなもの」(同)と言い、自身も藤井も「津田君を手のうちに丸め込んで自由にするあなたの靈妙なお手際」(八十三)に驚いていると伝えている。他方で、「津田君の僕に対する軽蔑丈は昔も今も同様」(八十五)としている。しかし、津田が延を「大事にする」(百三十三) ことに関してはそれが「岡本家の機嫌を取るのと同じ事」で、其岡本と吉川とは、兄弟同様に親しい間柄である以上、彼の未来は、お延を大事にすればする程確かになつて来る道理であつた」(百三十四)と説明される。実際にはそのことは小林も「看破」(同) 済みで、「利害の論理に抜目のない機敏さを誇り」(同) としている津田は妻を岡本夫妻や媒酌人である吉川夫妻との良好な関係性を保つために利用し、「小林のやうなみすばらしい男を、友達の内に有つてあるといふ証拠を、夫人に見せるのが厭」(百二十一) と思うことにもためらいはない。ただ、延に向けられるものとしての小林の言葉は、津田の一貫して打算的なありようとともに、結婚して変化したのが津田自身というよりも彼を取り巻く人間関係であることを内に秘めた形になつている。

次に、秀の台詞に目を向けると、「嫂さんをお貰ひになる前の兄さんと、嫂さんをお貰ひになつた後の兄さんとは、丸で違つてゐます。誰が見たつて別の人です」(百) とまで断じている。かつては「もつと正直(中略) 少なくとももつと淡泊」(百一) な性格であつたにも関

わらず、父に嘘を吐き小林と延の接触を心配している点を変つてしまった「証拠」(百二) として挙げ、「兄さんはそれ丈嫂さんを恐れてゐらつしやるんです」(同) と結んでいる。また、津田の小林への警戒と延への「恐れ」を同時に指摘していることから彼と清子とのかつての関係を知っていると考えられる秀は、兄の中に清子への思いが今も残つていふことを見抜いて「嫂さんを大事にしてゐながら、まだ外にも大事にしてゐる人があるんです」(百二) という言葉まで突き付ける。秀は延を「派手好きいな女」(九十二) として嫌つており、そのような兄夫婦の贅沢な暮らしを支える為に夫が津田の仲介として父に資金援助の約束を取り付けたことを苦々しく思つていた。ここからも結婚を機に変わったのが津田を取り巻く人間関係のありようであるといえ、秀は津田が延を「大事にする」真の理由を知らないからこそ「別の人」のように見えるのである。それと同時に秀は兄の言動から彼が延と結婚してからも清子をまだ「大事」に思つていふことを言い当てており、その証言とは裏腹に、津田自身に内面的に大きな変化があつたとは言い難い。

最後に、延は津田との馴れ初めを回想した後「最初無関心に見えた彼は、段々自分の方に牽き付けられるやうに変つて来た。一旦牽き付けられた彼は、また次第に自分から離れるやうに変つて行くのではなからうか。彼女の疑は殆んど彼女の事実であつた」(七十九) と振り返るが、後の場面では「愛する人が自分から離れて行かうとする毫釐の変化、もしくは前から離れてゐたのだといふ悲しい事実を、今になつて、そろく認め始めたといふ心持の変化」(八十三) を明かしている。津田は自身の結婚について「此己は又何うして彼の女と結婚したのだらう。それも己が貰はうと思つたからこそ結婚が成立したに違ない。然し己は未だ嘗て彼の女を貰はうとは思つてゐなかつたのに」

(二)と考えているほか、語り手からは「事実彼はお延を愛してもゐたし、又そんなに愛してもゐなかつた」(百三十五)と解説されている。京都出身の津田と延はともに一時帰省中の折に出会っており、親同士に交流もあったことから、長山靖生は「親の了解の下に仕組まれた一種の偽装見合いの可能性」を指摘している<sup>20</sup>。吉川仁子も「結婚には主体があつてしかるべきという、ロマンチックラブイデオロギーに従っているようでありながら、津田は打算的に結婚」したと結論しているが、「何うしても絶対に愛されて見たい」(百三十)と願う延にとつて津田は他人から夫にはなつたものの、その心は「前から離れてゐた」のだと言える。とはいえ延との関係が「第二の恋愛事件」(百三十四)であつたとされていることから、津田の方に全く好意がなかつたとも考えにくい。ここから読み取れるのは津田における「愛」と延における「愛」の意味合いが大きく異なつてゐるということである。

作中における現在は、津田が清子に去られてから「一年近く」(百七十二)経過し、延と「結婚後半年以上を経過」(六十六)した頃である。津田は自分の結婚について「己が貰はうと思つたからこそ結婚が成立したに違ない」とした直後に「然し己は未だ嘗て彼の女を貰はうとは思つてゐなかつたのに」と、論理的には矛盾した思いを抱いている。しかし、前者の裏には打算が、後者には清子への未練が読み取れることを考慮すれば、両者が決して相互に排他的ではなく両立は可能である。ただ、意識的にせよ無意識的にせよ、津田自身が「何だか解らない」(二)と片付けてそこに考えを向けられていないことが問題なのである。

ここで相原和邦の論考を参照すると、『明暗』には一人の登場人物の中で「形式論理的には相容れないはずの二つの概念が結合して、新

しい役割を担っている」と考えられる「矛盾叙法」と、二人以上の人物の「立場の対比」を行い「多面的な観点」を示す「対比叙法」が多用されていると指摘している<sup>23</sup>。そして、それらが「いずれも、一元的な叙法でなく、多面的な叙法であるという点で、また、孤立した事象をスタティックに絶対化してとらえるのではなく、他との関係の中でダイナミックに相対化して捉えているという点で、これらを総称して、相対的な表現方法もしくは相対把握と名づけることができる」と総括されている。この観点から先の「何だか解らない」を読み解くと、利己心と破れてなお残る「愛」とに引き裂かれた津田の内面が見えてくる。そして、ここで重要なのはそれを津田の心理としてではなく他者との関係性として見ることはないだろうか。即ち、延との結婚を通じた岡本家と吉川夫妻との関係、そして清子との関係への志向が併存しているということである。

これまでに分析してきた小林と秀と延の言葉からは結婚による津田の人間関係の変化こそが多く読み取れ、それにより彼自身が根本的に変化しているわけではないことが明らかになる。結婚後、岡本家や吉川家と結ばれた新たな関係を良好に維持するために延を「大事にする」必要が生じ、そのための金を実家から得るために秀の夫である堀に協力を求め、そのせいで実父や秀との軋轢が生じている。他方で一年前に断られた清子との関係を忘れられずにいる。従来の研究では津田は計算高く打算的な人物として見られてきた。しかしながら、津田を相原のいう「相対的な表現方法」から捉えるならば、そこに浮かび上がってくるのはむしろ結婚によって変つた人間関係に囚われたことで利己的に立ち回らざるを得なくなつてしまつた津田の姿である。

津田は「容易に己れを忘れる事の出来ない性質に父母から生み付けられてゐた」(九十七)とされる一方で、自身の過去を知る妹である

秀から「もつと正直（中略）少なくとももつと淡泊」であったと言われ、「軽蔑」をしてはいても「旧い交際」（百五十二）のある小林を今も「友達の内には有つてゐる」と自覚している。また、「平生からお延が自分の父を軽蔑する事を恐れてゐた。それでゐて彼は彼女の前にわが父に対する非難がましい言葉を洩らさなければならなかつた」（七）とあり、親子の情と妻に対する体面の板挟みになつてゐることも明らかである。これらは過去において津田が各人物と決して悪い関係にはなかつたことを示唆している。しかし、「平生から世間へ出る多くの人が、出るとすぐ書物に遠ざかつて仕舞ふのを、左も下らない愚物のやうに細君の前で罵つてゐた」（五）といい、「器量望みで比較的富裕な家に嫁に行つた」（九十七）という秀に「成上りものに近いある臭味」（同）を見出し、「何時か兄といふ厭めしい具足を着けて彼女に対するやうな気分支配され始めた」（同）という語りからは、その後の津田が環境の変化に伴い学歴や経済力、互いの関係性を基準に振舞うように變つてしまつたことが窺える。

以上を総括すれば、「日常生活の利害得失を一步も出ない人物」としての津田は、本人も無自覚なまま、他者との間で縦横かつ重層的に張り巡らされた関係性の中においてそのように出来上がつていったのだと言えるだろう。長い『明暗』の語りは、津田の人間性やエゴを追究しつつ「精神更生」を求めさせるというよりも、個々の関係性を積み重ねることによって人を利己的にならしめる人間関係の構造と力学を体系的に描き出すことを目指したもののなのである。

それでは津田には救いはないのであるか。この問題については彼における「愛」とともに後の章で語ることとして、その前に次章では彼の妻である延を対象とする。

#### 四、開かれる延

作品のもう一人の視点人物である延は、「誰でも構はない、自分の斯うと思ひ込んだ人を飽く迄愛する事によつて、其人に飽く自分を愛させなければ已まない」（七十八）という決意に示されている通り、自身の夫婦生活において「愛」というものに強く拘つてゐる。しかしながら、実際には「今の津田に満足してはゐなかつた」（六十）のであるが、「自分が何の位津田から可愛がられ、また津田を何の位自由にしてゐるかを、最も曲折の多い角度で、あらゆる方面に反射させる手際を至る所に發揮して憚らない」（百三十三）人物とされている。それは、「女として男に対する腕を有つてゐないと自白するのは、人間でありながら人間の用をなさないと自白する位の屈辱」（四十七）と考へていたからだろう。

池上玲子はこのような延の「愛」には同時代言説において強調されていた「性別役割へと接続する〈良妻賢母〉的な「愛」と、性別役割から切断する〈新しい女〉的な「愛」という反対のものが併存している」と指摘している<sup>24</sup>。別の視点として、吉川仁子は「夫の愛に確信が持てないとき、「惻愴」という自負は揺るぎ、「器量が好くない」という劣等感が浮かび上がってくる」、「夫の愛こそが彼女の自負を支えている」、「お延の愛というもののこの代わりはコンプレックスと表裏である」と述べている<sup>25</sup>。これら延の「愛」への執着は、田口律男の言う「結婚の根底に〈利害の論理〉を置く津田との間の「深刻な亀裂」<sup>26</sup>を示すものであるといえる。先行緒論はいずれも延の「愛」の特徴と危うさを示しており、飯田裕子は「愛」についてのみ語るお延の「愛」は、変化せねばならぬ誤りを含んだものとして描かれてゐる<sup>27</sup>としてゐる。



四方を見廻したお延は、従妹と共に暮した処女時代の匂を至る所に嗅いだ。甘い空想に充ちた其匂が津田といふ対象を得て遂に実現された時、忽然鮮やかな焰に変化した自己の感情の前に扑舞したのは彼女であつた。眼に見えないでも、瓦斯があつたから、ぱつと火が点いたのだと考へたのは彼女であつた。空想と現実の間には何等の差違を置く必要がないと論断したのは彼女であつた。顧みると其時からもう半年以上経過してゐた。何時か空想は遂に空想に留まるらしく見え出して来た。何所迄行つても現実化されないものらしく思はれた。或は極めて現実化され悪いものらしくなつて来た。お延の胸の中には微かな溜息さへ宿つた。(七十)

津田と結婚した後の「現実」によつて実現困難であると実感された「甘い空想」は、延の理想とする「愛」によつて充足された生活であつたのだから。そして、もう一步踏み込むならば、この「甘い空想」における「愛」は、「性別役割」や自身の「コンプレックス」を考へる以前の、どこまでも無制限かつ全的なものとして素朴に発想されてきたとも言えようか。相手が津田であつたのは偶然であり、まずは「甘い空想」と「愛」ありきであつた。それゆゑに「現実」との乖離は必然的に生じざるをえず、前掲の池上論や吉川論によつて指摘されるような陥穽も含みこんでしまつていてと考えられるのである。「如何にして異性を取り扱ふべきかの修養を、斯うして叔父からばかり学んだ彼女は、何処へ嫁に行つても、それを其儘夫に応用すれば成効するに違ないと信じゐた」(六十二)という延からすれば「愛」とはどこまでも自らの力によつて思い通りに得られるべきはずのものであつたことは疑えない。それゆゑに第三者に津田を語る際にはその物

足りなさを十全なものとして弥縫せずにはいられないのである。このような観点から捉えた延の「愛」とそれに基づく結婚生活には様々な形での問題が考えられようが、ここからはその手掛かりとして秀の言葉を取り上げたい。

まずは、津田に別の女性の存在を疑う延が秀から情報を引き出そうと始めた対話の中で発せられた、「好きな女が世の中にいくらでもあつて、あなたが一番好かれてゐる方が、嫂さんに取つても却つて満足ぢやありませんか。それが本当に愛されてゐるといふ意味なんですもの」(百三十)という台詞である。これに対する延の返答が「あたしは何うしても絶対に愛されて見たいの。比較なんか始めから嫌ひなんだから」(同)というものである。ここからは、その「愛」を理想的かつ排他的な一対一の人間関係として想定していたということが明らかになるのである。

次に、津田夫妻への批判として投げかけられた「あなた方お二人は御自分達の事より外に何にも考へてゐらつしやらない方だといふ事なんです。自分達さへ可ければ、いくら他が困らうが迷惑しやうが、丸で余所を向いて取り合はずにゐられる方だといふ丈なんです」(百九)という台詞である。延の「甘い空想」としての結婚生活は、言うまでもなく津田との「愛」に満ちたものだろう。しかし、「現実」には津田の実家からの援助を前提とする「贅沢」に過ぎず、秀はそのことを苦々しく思い、津田も延自身も決して心から満足できるものにはなつていない。それでいて延は幸福であるかのように振舞わなくてはならない状況にある。津田が他の人々との関係性の網の中に囚われてゐるのに対して、延は「愛」と理想の夫婦関係に拘泥するあまり周囲や津田にさえ距離を感じて一人遊離しつゝある。

秀は延の義妹ながら一歳年上の二児の母であり、「道楽者」(九十

二)の夫の他に義母、義弟、義妹、親類とも同居し、延からは「万事自分より世帯染みてゐる」(百二十六)と見られている。「器量望みで貰はれた」(九十一)こともあり、津田と二人で暮らす延とは対照的な人物として設定されており、その言葉は「甘い空想」を演じながら「現実」との裂け目を前に佇む延の姿を照射している。

しかし、「もし夫が自分の思ふ通り自分を愛さないならば、腕の力で自由にして見せるといふ堅い決心」(百五十)を抱いていたという延も最終的には自分に秘密を打ち明けるよう津田に懇願する。そしてその答えが「黙認に近い自白に違ひないといふ事を確かめた時、彼女は口惜しがると同時に喜んだ」(同)とされている。ここに至って延が策を弄することなく津田に向き合ったことは意義深く、岡本で培った「如何にして異性を取り扱ふべきかの修養」の通用しない別個の存在として夫を認めたのである。それに加えて、「愛」や結婚生活が排他的なものではなく他者が関わるものであることを受け入れている。この場面において延の自閉的な「甘い空想」と「愛」は他者と関係せずにはいられない「現実」へと開かれていったのである。温泉地へと発つ津田に向けた「何だか知らないけれども、あたし近頃始終さう思つてるの、何時か一度此お肚の中に有つてる勇気を、外へ出さなくつちやならない日が来るに違ないつて」(百五十四)という言葉は、近く「愛」をめぐつて夫と別の女性と対峙しなくてはならないという認識と覚悟を如実に物語っている。

漱石は作中で津田から延へと視点を切り替えたことに対する抗議への回答を行った書簡に「主人公の取かへたのに就ては私に其の必要があつた」(28)、「斯ういふ女の裏面には驚くべき魂胆が潜んでゐるに違ないといふのがあなたの子期で、さう云ふ女の裏面には必ずしもあなたの方の考へられるやうな魂胆ばかりは潜んでゐない、もつとデリケート

ないろいろな意味からしても矢張り同じ結果が出得るものだといふのが私の主張になります」(29)と記している。作者の言葉を素直に受け取るならば、延の内面を語るべき必要はあつたが、それ自体は決して深刻なものではないということになる。常に周囲と「度胸比べと技巧比べ」(百四十六)を繰り返しているような延であつたが、その中心は純朴ともいえる「甘い空想」と「愛」への願ひであつた。延に寄り添つた語りは、それがいかにして「現実」に沿つたものへと変わっていくのかをとらえようとしていたのではないだろうか。

このように、延は作中で精神的成長ともいえる変化を見せている。しかし、津田は清子の存在を隠し続けたまま温泉地へと向かう。次章では津田における「愛」を分析する。

## 五、「愛」

有体にいふと、お延と結婚する前の津田は一人の女を愛してゐた。(百三十四)

事実彼はお延を愛してもゐたし、又そんなに愛してもゐなかつたからである。(百三十五)

津田が清子を「愛してゐた」ことと延を「愛してもいた」ことはとりあえず作中で断言されている。しかし、「愛」を問題にし続けている延に対して、津田はそうではない。飯田祐子は『『明暗』の「愛」は何かと二項対立をつくることもなく、定義がはっきりしないのである。しかし同時に、その意味で、まさに『明暗』は「愛」だけを扱おうとしたテキストなのだとも思われる。「愛」を通して何かを語ろう

としているわけではないからだ」としている<sup>30</sup>。確かに作品は「愛」の定義を明言しておらず、前章で取り上げた延の場合のように、人物像を理解する手がかりではあってもそれ自体の問題性を追究するものとして語られてはいなかった。それでは津田においてはどうか。彼にとって延と清子が如何なる女性であったのかを比較する。

かつて津田と清子の関係は「いざといふ間際」(百三十五)、つまり結婚目前まで迫っていた。一方、延とは「己が貰はうと思つたからこそ結婚が成立したに違ない。然し己は未だ嘗て彼の女を貰はうとは思つてゐなかつた」と語られている。第三章で確かめた通り、津田が延と「打算的に結婚」したのあつてみれば、「貰はうと思つた」のは自身の利害計算の結果であり、それまで「未だ嘗て貰はうと思つてゐなかつた」のは「相思の恋愛事件」(六十六)の相手である延に不足を感じていたためとも、清子への未練を引きずっていたためとも読み取れる。確かなことは津田の「愛」はより清子との相性が良いものであつたということである。

斯んな場合に何方が先へ口を利き出すだらうか、もし相手がお延だとすると、事實は考へる迄もなく明瞭であつた。彼女は津田に一寸の余裕も与へない女であつた。其代り自分にも五分の寛ぎさへ残して置く事の出来ない性質に生れ付いてゐた。彼女はたゞ随時随所に精一杯の作用を恣まゝにする丈であつた。勢ひ津田は始終受身の働きを余儀なくされた。さうして彼女に応戦すべく緊張の苦痛と努力の窮屈さを嘗めなければならなかつた。

所が清子を前へ据ゑると、其所に全く別種の趣が出て来た。段取は急に逆になつた。相撲で云へば、彼女は何時でも津田の声を受けて立つた。だから彼女を向ふへ廻した津田は、必ず積極的に

作用した。それも十が十迄楽々と出来た。(百八十五)

右は延と清子の違いについて津田が思いを巡らせている場面である。前章で論じたように、延は自らの手腕によって津田から思い通りに「愛」を引き出せると信じていた。そのため常に受け身にならざるを得ず、「緊張の苦痛と努力の窮屈さ」が感じられる。これに対して清子が相手であれば積極的に動く事ができてすべてが「楽々と出来た」。津田は男女関係において「余裕」や「寛ぎ」を求めている。

別の場面を見ると、「其時分の清子は津田と名のつく一人の男を信じてゐた。だから凡ての知識を彼から仰いだ。あらゆる疑問の解決を彼に求めた。自分に解らない未来を挙げて、彼の上に投げ掛けるやうに見えた。従つて彼女の眼は動いても静であつた。何か訊かうとするうちに、信と平和の輝きがあつた。彼は其輝きを一人で専有する特権を有つて生れて来たやうな気がした。自分があればこそ此眼も存在するのだとさへ思つた」(百八十八)と語られている。「余裕」と「寛ぎ」のなか、全幅の信頼を寄せてくる相手を導くこと。かつて津田は清子をそのように「愛してゐた」。しかし、詳細は語れていないものの、清子が津田の元から去つてゐる。

他方で、津田夫婦生活は「財力に関する妙な暗闘」(百十三)、「極めて平和な暗闘」(百四十七)、「度胸比べと技巧比べ」(同)、「愛の戦争」(百五十)として様々に語られ、特に「愛の戦争」に注目すると、延が「たゞ彼を征服する点に於てのみ愛の満足を感じる通りに、負けるのが嫌な津田も、残念だとは思ひながら、力及ばず組み敷かれるたびに降参する」(同)のが常であつた。津田は延を「女だと見下ろしながら、底気味の悪い思ひをしなければならぬ場合」があつたが、「偽りのない下手」(同)にいられた途端に逆転を感じて「彼は漸く彼

女を軽蔑する事が出来た。同時に以前よりは余計に、彼女に同情を寄せる事が出来た」（同）という。その「軽蔑」は、夫婦生活に安らぎをもたらすことなく「暗闘」や「戦争」を持ち込み続ける延への蔑視感情であるが、自分が優位に立ったと感じられたがゆえにもたらされている。

言うまでもなく恋愛と夫婦生活とは異なるものである。現に津田は自身の夫婦関係のために延だけではなく実家、秀、吉川夫人、小林らとの間でそれぞれ駆け引きを展開せざるを得ない状況に陥っている。その中で「極端に云へば、黄金の光りから愛其物が生れると迄信ずる事の出来る」（百十三）とされていたことも鑑みれば、打算的に結婚した延との夫婦関係における「愛」が多分に異質なものになってしまっていることが確かめられる。津田からしてみれば、未練に思い続ける清子との日々はごく甘美に想起されるだろう。

清子の登場と延との比較は、津田における「愛」をめぐる過去と現在を対照的に浮かび上がらせる。それによって明らかにするのは、津田がどのような関係性によって充足され得るのかということと、それに反して現在の生活がいかに汲々としているのかということである。無論作品が未完に終わったため、そのことを自覚したのであろう津田が、清子が自分を捨てた理由を含めて自らをどう省みたかは想像の域を出ない。延の「勇氣」が津田のためにどのように発揮されていくのかも語られることはなかった。

本作における「愛」は、それ自体を追究すべき主題というよりも、津田と延がいかに相手や周囲の人々と関わっているのかということと、なぜ二人がともに現在の結婚生活に満足を見出せないのかを読み解く手がかりとなっている。しかし、それは問題の根源ではなくただの起点として捉えるべきであろう。第三章で述べたように『明暗』が

人を利己的にしてしまう人間関係の構造と力学を描き出そうとしているのであってみれば、津田の「愛」のように変質してしまうことさえあるからだ。人々は幸福を求めながらどうしてそこから遠ざかることになってしまうのか。津田と延の視点、そして清子という存在が配置された本作では、人々が交錯しすれ違う関係性においてそのことが問われ続けている。

## 六、おわりに

これまで津田と延に着眼して作品の全体像を概観してきた。最後に、「則天去私」と『明暗』の関わりについてこれまでの論述をふまえて言及しておきたい。

本稿第二章において、「則天去私」は『明暗』執筆中に見出されたものであり、「思ひ出す事など」の「ヂスイリユージョン」に始まって『彼岸過迄』、『行人』、『心』、『硝子戸の中』、『道草』を経て「点頭録」へと展開した問題意識の先に位置するものだろうと述べた。そして、その「点頭録」では日常における相反するものだろうと述べた。それは「一体二様の理解を抱くことが宣言されていたが、『明暗』においては登場人物の心理や立場がまさにそのような形で多元的に語られていた。

ところが、第二章では触れなかったが、「点頭録」にはもう一つ注目すべきことがある。それは、軍国主義を語る際に「もう少し低い見地に立つて、もつと手近な所を眺める」（『軍国主義』二二）だけではなく、「自分はもつと高い場所に上りたくなる。もつと広い眼界から人間を眺めたくなる。さうして今独逸を縦横に且獐猛に活躍させてゐる此軍国主義なるものを、もつと遠距離から、もつと小さく観察した

い」(同(三))としている点である。同様の記述は『硝子戸の中』の最終章にも見られ、「何故あんなものを書いたのだらうといふ矛盾が私を嘲弄し始めた。有難い事に私の神経は静まつてゐた。此嘲弄の上に乗つてふわ／＼と高い冥想の領分上つて行くのが自分には大変な愉快になつた」(三十九)とされている。この時点では「矛盾」を保留する手段であつたのが、「点頭録」では「広い眼界から人間を眺める」ために積極的に採用されているのである。

やや乱暴にまとめると、日常の諸相を水平的に眺めるための「一体二様の見解」という態度と、対象を垂直的に俯瞰するための「高い場所」への上昇という志向性が後に『明暗』執筆中に「則天去私」という概念として形成されていったのではないかということである。しかし、大いに注意を要するのは、「広い眼界から人間を眺め」というのは結果的にその段階に至るのであつて、まず「低い見地に立つて、もつと手近な所を眺める」ことなしには達成されないと考えられる点である。

『明暗』執筆中、漱石は延の人物形象について記した書簡の中で、「女主人公にもつと大袈裟な裏面や凄まじい欠陥を拵へて小説にする事は私も承知してゐました。然し私はわざとそれを回避したので。何故といふと、さうすると所謂小説になつてしまつて私には(陳腐で)面白くなかつたからです」と明かして<sup>31</sup>いた。これまで明らかにしてきたように、延にしても津田にしても、その内面に特殊な設定が与えられているわけではない。しかし、語り手は人物の心理を閑却することなく他者との関係において一つひとつ丹念に描写し、それを積み重ねることで人と人との関わりを総体を捉えつつあつた。その過程において「則天去私」は萌芽していったのであろう。

以上のような手法によって語り進められた本作に関して、本稿では

秀や吉川夫人、小林といった主要人物や「技巧」、金力、京都、温泉といった重要な問題を論じるには至らなかつた。しかし、今後それらを対象とすることで、作品がどのように「広い眼界から人間を眺める」ことを目指していたのかをより明確にしていきたい。

#### 付記

夏目漱石の著作物の引用はすべて『定本 漱石全集』(岩波書店、二〇一六年二月—二〇二〇年三月)に依り、ルビは省略した。

#### 注

- (1) 途中で休載を挟みながら、「東京朝日新聞」は五月二六日から二月一四日まで、「大阪朝日新聞」は五月二五日から二月二六日まで。
- (2) 江藤淳『夏目漱石』東京ライフ社、一九五六年二月。
- (3) 平岡敏夫『漱石研究』有精堂、一九八七年九月。
- (4) 原題は「漱石山房の一夜——宗教的問答——」(『現代佛教』第一〇〇号、一九三三年一月)。引用は『漱石先生』(岩波書店、一九三四年一月)に依る。
- (5) 松岡譲『明暗の頃』(『漱石全集』月報第一九号、岩波書店、一九二九年九月)引用は『漱石先生』(岩波書店、一九三四年一月)に依る。
- (6) 久米正雄「生活と藝術と」(『文章倶楽部』第八号、一九一六年二月)。引用は『久米正雄全集』第一三卷、平凡社、一九三二年一月。
- (7) 森田草平『夏目漱石』甲鳥書林、一九四二年九月。
- (8) 松岡陽子マックレイン『孫娘から見た漱石』新潮社、一九九五年二月。
- (9) 第一回は一九一六年(大正五)年一月一日に「東京朝日新聞」と「大阪朝日新聞」に掲載され、第二回から第九回までは同月一〇日から二一日にかけて、それぞれ異なる休載日を挟みながら連載された。しかし、漱石が糖尿病(当初はリウマチ思つていたが後の診断により糖尿病であると発覚した)からくる腕の痛みを訴えたことで執筆が中止され、そのまま終了となつた。
- (10) 第五回に「病中は知ると知らざるとを通じて四方の同情者から懇切な見舞を受けた。衰弱の今の身では其一々に一々の好意に背かない程に詳しい礼状

を出して、自分がつい死にもせず今日に至った経過を報ずる訳にも行かない。「思ひ出す事など」を牀上に書き始めたのは、是が為である。——各各に向けて云ひ送るべき筈の所を、略して文芸欄の一隅にのみ載せて、余の如きもの、ために時と心を使はれた難有い人人にわが近況を知らせる為である」と書かれている。

(11) 第一回に「小さい私と広い世の中とを隔離してゐる此硝子戸の中へ、時々人が入つてくる。それが又私に取つては思ひ掛けない人で、私の思ひ掛けない事を云つたり為たりする。私は興味に充ちた眼をもつて夫達の人を迎へたり送つたりした事さへある。／私はそんなものを少し書きつゞけて見やうかと思ふ」と書かれている。

(12) 拙稿「夏目漱石『硝子戸の中』論」〔立命館文学〕第六四〇号、二〇一四年一月）にて論じている。

(13) 三好行雄「作品事典」〔夏目漱石事典〕学燈社、一九九二年四月）

(14) 江藤淳「夏目漱石」東京ライフ社、一九五六年一月）

(15) 連載開始前の一九一五（大正四）年二月二十五日付山本笑月宛書簡では、本来は元日に掲載を求められていたが、「どうも御目出度いものとなると一向趣向がうかびませんので（中略）去年の例にならひ正月上旬迄延ばしてください」と依頼している。実際には戦争とは無関係な内容の第一回が元日に「東京朝日新聞」と「大阪朝日新聞」に掲載され、第二回以降の連載はそれぞれ同一〇日と一二日に開始された。

(16) 一九一六（大正五）年二月一八日付山本笑月宛書簡中に「転地中に稿をつぐつまり」としていたが、連載が再開されることはなかった

(17) 『言海』吉川弘文館、一九〇四年二月

(18) 松元寛『増補改訂 漱石の実験―現代をどう生きるか』朝文社、一九九七年一月

(19) 唐木順三『夏目漱石』国際日本研究所、一九六六年八月

(20) 長生靖生「不可視と不在の『明暗』」〔漱石研究〕第一八号、二〇〇五年一月）

(21) 吉川仁子『夏目漱石「明暗」論——結婚の要件——』〔叙説〕第三八号、二〇一一年三月）

(22) 相原和邦「漱石文学における表現方法——『明暗』の相対把握について——」〔日本文学〕第一四卷第五号、一九六五年五月）

(23) 前傾の相原論によると「矛盾叙法」は全二二〇例あり、津田が六一、延は四一、その他が一八とされている。また、「対比叙法」は全三九七例あり、対立的なものが二二七、一致的なものが一〇四、齟齬的なものが六六とされている。

(24) 池上玲子「女の「愛」と主体化——『明暗』論——」〔漱石研究〕第一八号、二〇〇五年一月）

(25) 註(21)に同じ。

(26) 田口律男「ストラテジーとしての「結婚」——「明暗」論序説——」〔山口国文〕第一四卷、一九九一年三月）

(27) 飯田祐子「『明暗』の「愛」に関するいくつかの疑問」〔漱石研究〕第一八号、二〇〇五年一月）

(28) 一九一六（大正五）年七月一八日付大石泰蔵宛書簡

(29) 一九一六（大正五）年七月一九日付大石泰蔵宛書簡

(30) 註(27)に同じ。

(31) 註(29)に同じ。

（大谷大学助教）